

わたしの故郷

ふるさと

米田珠子

私の出身は石川県の能登半島にある漁師町だ。くつつき合うようにして家が建ち並び、朝はサイレン、夜は船のポンポンという音を聞きながら大人たちは漁や工場へ出かける。子どもの頃、年に一度の祭りには「ここに生まれてよかったな」と思ったものだった。しかし、年齢が進むにつれて、このゴチャゴチャした町よりもスマートな町に憧れるようになっていった。

子どもの時のことだ。

大人の怒鳴り合いに目が覚めた。酔っぱらった祖父と叔父たちの争いに心がつぶれるほどだった。包丁を持ち出した誰かに「やめんかい！」と止めに入る父。「何やとー」とぶっかける声。母をなじる声も聞こえてきた。「父が包丁で刺されたらどうしよう。」私は真っ暗な隣の部屋で布団に丸がり、息を殺して、目をつぶって、時がたつのを待つのだった。

父と母がケンカして、母が兄と姉を連れて家を出るときだった。父が「珠子はどうするんや！」と叫ぶと「この子は置いていく。」とくるりと背を向けて、出て行った。「うわっ！」と後ろから追いかけて、小さい私が玄関まで出たとき、三人の姿はすでになかった。置き去りにされた怒りで玄関の板の間でじだんだ踏み、声がかれるまで呼んだら、きつと母ちゃんが引き返すだろう、と叫び続けた。けれど、どれだけ呼んでも現れなかった。この時、自分がどれだけ訴えても、諦めなければいけないものがあると思った。数日後、母は帰ってきたが、この場面だけが今も鮮明に思い出される。

大きくなるにつれて、私は自分の町が「言葉が汚い」「怖い」と言われることを知るようになる。高校の通学列車に行商のおばちゃんたちが乗り込むとき、ブーンと魚くさいにおいがする。カゴの中に生魚なまこ、干物、お総菜をぎっしり詰め、節くれだった手でより分けている。体が隠れるくらいのカゴを背負った魚売りの行商のおばあさんの曲がった腰や身なりを「みつともないなあ、汚いなあ。」と感して知らないふりをして遠ざけていた。

大学を出て教員になり、ワンランク上がったようだった。教養らしきものを身につけたつもりで、とにかくいい先生にならなくてはいけない、と格好だけ理想の先生像を演じ、実は自分というものを深く見つめたことはなかった。

ある日、ついに自分を取り繕つくろうことに、疲れてしまった。自分は一人だ、誰

とも自分はつながっていけないと思ったとき、大きな虚脱感^{きよだつかん}でいっぱいになった。その朝、布団から起きあがれなかった。体が鉛のように重く、肩の力が抜け、堰^{せき}を切って大泣きした。生徒たちにはいいとこばかり見せようと強がっていたが、何もかも投げだし、もううんざりだと思っていた。誰にも会いたくなかった。家族と先輩が驚き、「休めばいいんだ。」と受け止めてくれた。この一言で私はホツとし、自分を取り戻し始めた。

月日が過ぎ、自分が親になって見えてくるものがあつた。

祖父の葬式で泣かなかつた父が号泣したのは、祖母の死だった。母と私たちだけになつたとき、「なんでおれを置いていってしまった！」と子どものように泣いた。いつも威厳^{いげん}を持ち、箸^{はし}を落としても怒鳴る父だった。父は八人兄弟の長男として頼りにされ、がんばらなければならなかったことがつらかったのだと気づいた。父にも私と同じ苦しみがあつた。父をそんなふうに見られるようになった。

女学校をでた母は、結婚で生活が一変したのだと思う。嫁^{とつ}いだ家の内情は惨憺^{さんたん}たるもの。何もかも放り出したくなるのが当たり前だったかもしれない。ふり返つてみると、幼い日に出て行った母が自分と重なつた。何もかも投げ出して、受け入れられなくなったのは母も自分も同じだと気づいた。母も若い頃生活のため行商をし、なおも子どもに夢を託そうと働いた背中。子どもの頃、私が腎炎を患つた日、暗い夜道を医者まで私をおぶって歩いた暖かい背中だったと思ひ出した。

昨年、法事で故郷に帰つたとき、近所のおばさんの身振り手振りに惹かれ、聞き耳を立てた。「遠い在所まで行つても、ひとおつも買ってくれん時もあるわいね。カラスがカーカー鳴いとして、たった一軒しかない家もあるげんよ。でも、『待つとつたわいね。あんたが今日会つた初めての人や。』と言われると、ああー、今日来てよかつたと思うわいね。それにいっぱい買^かうてくれたしね。」何とも味わい深く豊かな語り口は、まさに故郷の人そのものだった。

私はうまく人とききあおうと無理をし、傷つけられたくないため都合よく人を選び、その人に合わせ顔を使い分けてきた。家族や先輩たちの一言で自分を取り戻すことができた。自分というものを深く見つめる中で、父母や故郷の町をそのまま受け止めることができた。私はこれから飾らない素顔の自分である教師として、生徒と向き合っていきたいと思う。

注 布団に丸かり〓布団に包まれて丸くなること。

在所〓集落のこと。

わたしの故郷ふるさと（中学校用）

A 教材設定の理由

「故郷を隠すことなく生きる」これは同和教育が求めるもっとも大切な生き方の一つである。生まれた場所や家が、歴史的に差別されてきた地域や家であるということによって差別され続けることは理不尽なことである。しかし、その差別の厳しさ、怖さゆえに故郷を隠して生きている人がいる。同和教育は、その心情に思いを寄せながらも、差別に立ち向かって生きるために、故郷をとらえ直すことを求めてきた。

故郷をとらえ直すとは、自分の生まれた地域や家を、かけがえのない自分だけのものとして受け止めることである。それは自分の姿をありのまま肯定的に受け止めることに通じ、故郷が被差別の地域でなくても大事なことである。そうした人は、故郷を差別する者、人を差別する者に対する怒りや立ち向かう勇気がわいてくる。

しかしながら、故郷をとらえ直すということは、今までふたをしていた部分に目を向けるというつらい作業である。

本教材では、故郷を遠ざけていた筆者が、それを受け止められるようになるまでの心情をじっくり味わうことによって、生徒たちに自分の故郷や家族のことを考える手だてとしたい。

B 教材の解説

筆者の米田珠子さん（当時も今も穴水中学校）は、聴覚障害をもつ男子生徒N君と出会ったとき、当初その障害からくる不全さのために生きにくくならないようにと、障害者に対する配慮を心がけた。

そうは思うものの実際には、様々なトラブルの原因がN君のほうにもあると考えてしまうのだった。そう考えているうちは、周りの生徒たちにN君に対する配慮を求めても、それは届かなかった。そんな自分のふがいなさを生徒たちの前にさらけ出したとき、初めて米田さんは、自分も生徒たちと同じく、N君と共に生きる存在となることができた。

N君は理解する対象ではなく共に生きる仲間なんだ、N君の生きづらさは自分も含めた周りの人間の問題なのだ気づいたとき、米田さんは自分の生い立ちをふり返った。父の生きづらさ、母の生きづらさに思いをはせ、その生きざまをかけがえのないものとして感じ取られるようになった。すると、その中で育った自分をありのまま受け入れられ、さらにずっといやでいやでたまらなかった、故郷の人たちの暮らしや息づかいまでもが、温かい味わいのあるものとしてよみがえってきた。

差別からの解放というのは、単に差別されている人が差別されなくなることではない。人が、自分を受け入れられなくしている鎖から自らを解き放ち、その人らしく生きられるようにすることなんだということを、米田さんの実践は指し示している。

C 教材の使用にあたって

地域と人はつながって生きている。今住んでいる地域に思いをはせるとき、「いいと

こ探し」に終わらせず、そこに生きる人々の思いや生きざまに触れるようなとりくみを展開してほしい。

- ② 本教材を使うにあたって、まず教員自身が自分の故郷を語ることも良い。また、地域や故郷にとらわれず、家族へのとらえ直しにつながるような展開も考えられる。
- ③ 生徒が感想として地域のマイナスイメージを書いてきたとき、そのままにしておくことなくそれを取り上げて、次に展開してほしい。

D 参考資料

第51回全国同和教育研究大会報告
「けど、友だちや」

E 授業の展開例

授業の展開と主要発問	学習内容と支援
<p>1 導 入</p> <p>① 自分の家族、住んでいる町、生まれ育った町について考えたことはありますか。</p> <p>2 展 開</p> <p>② 「私の故郷」を読みましよう。</p> <p>③ 感想を話し合う。</p> <p>④ 「私は、・・・・・・・・」と、自分の体験を語る。</p> <p>3 まとめ</p> <p>⑤ みなさんも自分自身について、家族、故郷について考えて書いてみましょう。</p>	<p>① 学習課題を明らかにする。</p> <p>② 指導者が読み聞かせた後、わからない言葉があったら説明する。</p> <p>③ 心に残ったところがあれば、数人の発表を聞いても良い。</p> <p>④ 指導者が本文と重なるような経験を話せると良い。</p> <p>⑤ 本時では作文に集中する。</p>